

和紙の技術・文化史

黒川 威人

はじめに

古代中国で発明された紙は、西漸を続けるうちにやがてヨーロッパ文明と出会い、今日の洋紙として発展したが、朝鮮半島を経て我が国へ伝播したそれは、水や植物原料など豊富な天然資源と相俟って、わが国流に陶冶され『和紙』となった。

紙の消費量を持って文化のバロメーターとする考え方があるが、日本の和紙の歴史はそのまま日本の文化史であると言っても誤りではない。それは単に書写印刷の材料にとどまらず、多くの生活用具や、さらには絵画、工芸などあらゆる日本文化の形成に深くかかわり合ってきたのである。

なお、ここでいう紙とは、植物繊維を叩解した後水中に懸濁させ、平滑なシート状に漉き上げたものをいい、編組の応用であるパピルスや山羊の皮を加工したパーチメントなどは含まない。

しかし今日では科学技術の発達により、非常に多くの種類の紙が氾濫しており、何をもって紙とするかさえ難しくなっている。同時に日本独特の和紙はさがし求めないかぎり、日常われわれの目にふれることはないくらいに、衰退している。このため、ともすればその意義、価値は見失われがちである。

だが、和紙の意義、価値そのものは決して失われた訳ではない。たとえば近年洋紙の酸性化が問題になり、古い図書をいかに中和するかが問題となったおり、純粋な和紙は千年を経ても腐朽しない事実が見直されたのは技術的側面であるし、日本画や書道や和歌の料紙として、さらには各種工芸の素材として、日本的美の表現には欠かせない存在となっているのである。数多くの洋紙のなかには、和紙の風合を模した

ものが、今日なおかなりの割合で生産されている事実などがそれを如実に示している。

軽さや強さ柔軟性といった実用性が、工芸の素材として果してきた役割の大きさは今さら述べるまでもないであろう。

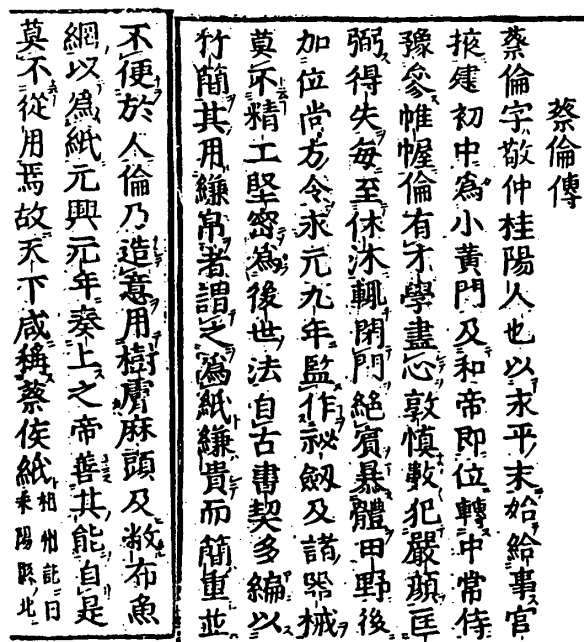
ここでは、和紙の歴史の変遷を、技法と共にデザインなど文化的側面の両方から眺めようとするものである。

1 紙の起源と伝播

1 蔡侯紙

『樹の皮、麻のくずおよびボロ布、魚網を原料として紙を作り、みかどにたてまつった』との後漢書の記述から、一般には中国の蔡倫が紙の発明者とされている。

しかし、西洋における活版印刷術の発明と同様、これほど大きな発明が一個人の手で完成さ



第1図 後漢書－蔡倫伝（部分）

れたとは考えにくい。事実、中国大陆における近年の考古学上の成果によれば、それ以前と考えられる紙片がいくつも発見されており、現在ではその起源は前漢時代と信じられている。

察するに、彼が作ったものは、それまでのものに比べ、格段に上等で、しかも実用性に富んだものであったのだろう。先の後漢書によれば人々はこれを蔡侯紙と称し、その功をたたえたという。時に元興元年（105）のことであった。（第1回後漢書、蔡倫伝・部分）

2 紙の西漸

中国で普及した製紙技術は、やがてシルクロードをたどって西へ西へと移って行くことになるが、そのきっかけとなったのは751年、当時の中国の唐と西方の覇者サラセン帝国が、トルキスタンのタラス河をはさんで展開した戦いである。この戦いに破れた唐軍からは、多数の将兵が捕虜となったが、中には製紙の技術者も含まれていた。アラビア人達はこの捕虜たちから製紙の技術を教わり、紙の製造を始めるに至ったのである。最初の工場が建てられたのはサマルカンドで757年のことであった。

約半世紀を経てサラセンの首都バグダッドへ伝播した製紙術は10世紀にはエジプトに工場が建てられるに至る。当時イスラムの勢力は、アフリカの北岸沿いにのびてスペインにおよんでいたもので、製紙術もこのルートにそって伝わった。従って、ヨーロッパで最初に紙を作ったのはスペインで12世紀のことであった。またイタリアでも13世紀の半ばすぎに紙が作られた。このようにして南部ヨーロッパからはじまった製紙術は、それからの4～5百年の間にヨーロッパのほぼ全土に工場が建設されるに至りノルウェーでは1650年に、さらにはるか太平洋を渡って1690年にはアメリカのフィラデルフィア郊外に製紙工場が出来ている。もち論すべて手漉きの紙であって、今日いわれている溜漉き^{ためず}という方法であった。原料は麻ぼろを主として（綿ボロが使われるようになるのは大航海時代以降であろう）それを煮て、つき砕いて繊維をほぐし、金網の漉き簀ですき上げて1枚毎に毛布を敷いて積み重ね、手締め^{てしめ}のジャッキなどで水分を切ってか

ら、ひもにつり下げ自然に干し上げる。今日かすかに残っているヨーロッパの手すき紙は大むねこのような方法によっている。

またネパールなどの後進地域では紙料液を簀に漉きこんだまま水を切り、そのまま立て掛けて乾燥させる方法を取っているが、おそらくは最も発明当初の技法に近いものなのではあるまいか。いずれにしろこのように漉き簀にくみこんだ紙料液を、若干ゆするにせよ自然に水が落下するのを待つやり方（溜漉き）が、その技法の主たるものであった。

3 日本への伝播

それでは、対するわが国へはどのように伝わったのであろうか。紙の製法は日本へは610年に朝鮮半島からもたらされたことになっている。これは日本書記の記述にもとづくもので『推古天皇の18年（610）春三月に、高麗の王が曇徴、法定の二僧を貢上してきたが、そのうち曇徴は五経をよく知っていたばかりか、絵の具や紙や墨の製法にも通じていた』という下りが根拠とされている。しかし同書には続いて『並びにみずうす（水車利用の臼）を作ったが、わが国でみずうすを作ったのはこの時が最初であらうか』との記述があるのに、紙に関しては何らの注釈もないのである。

おそらく製紙技術は大陸や半島から潮が打ち寄せるがごとくわが国に流入してきた仏教とともに、いつの間にか伝来していたのであろう。曇徴はただ、より優秀な技術をもたらしただけで過ぎぬのではあるまいか。ただその時期は、寿岳文章氏によれば、万葉集の歌の中に紙のことが全く出てこないところから、推古朝をさかのぼることさほど遠くない時期にわが国に伝わったものと推量されている。

なお越前の五箇には、この史実以前の時代に紙漉きが発したとする伝承が存在するが、朝鮮半島と向い合う立地条件とともに、古くからの優秀な製紙産地でもあり興味深い。

さて、いずれにしろこうして日本へ定着した製紙技術であるが、当初は蔡侯紙の流れをくむ麻の古布などを使った溜漉きであった。

『延喜式』（927）によれば官立の製紙工場で

ある『紙屋院』で使用する製紙原料として『布』（アサヤコウゾで織られた布）『穀』（カシノキやこうぞの韌皮繊維）『斐』（ガンピを主としたジンチョウゲ科の植物の繊維）『麻』（タイマヤマオなどの繊維）『苦参』（マメ科の植物クララ）を上げており、おおむね蔡倫が使った原料と似ている。ただ不思議なのは苦参が歴史上に紙の原料として現れるのはここだけで以降は全く見られないことである。クララはかむと頭がクラクラとするほど苦いところからその名の由来が来ているといわれ、駆虫剤として使用されているところから、少量の特別大切に保存する紙には虫除けとして他の材料に混入して使用されたことが想定される。また弊布や魚網の名も見られないが、これらは植物資源に恵まれたわが国の場合、あまり必要としなかったことと、清浄を尊ぶ気風が既にわが国上代人にはそなわっていたということかも知れない。

2 和紙の誕生と成長

1 和紙誕生

さて『延喜式』の巻13^{ずしよりよう}図書料の項目にはもっとも注目すべき規定がみられる。

それは『色紙を作る場合には布一斤（約600g）と斐五両（約180g）とを混合して三十張製造する。また上質の紙をつくるには穀皮と斐皮とをそれぞれ一斤ずつ混合して三十張にする』との記述があることである。

色紙は染色の過程で耐水強度を必要とするが、このように丈夫な紙や上質な紙を作る場合には斐を一定の比率で混入することが定められていたのである。

ではなぜこれが最も注目すべき規定なのか。即ち、斐はガンピに代表されるジンチョウゲ科の一群の植物を指すが、その繊維は繊細であるのみならず、特に粘質成分に富み、これを混合すると、水中で繊維の分散を良くし、簀からの水もれが遅くなり、繊維が均一にからみ合うようになる。そしてなめらかな地合の、丈夫な紙が得られるのである。

しかしこれだけならば、今日に至るも同様の目的でガンピの混入はなされている。重要なこ

とは紙屋院の熟練した技師が、この粘質成分が漉き易さとともに紙質を決定することに気づき、やがて適当な植物から粘液だけをしぼり取り、これを紙料液に混入する方がむしろ便利であることを発見したところにある。粘液を出す植物として多くの植物が試されたが、結局、今日使用されているトロロアオイ（黄燭葵）やノリウツギ（糊空木）などが最も良いことが分かった。このことが和紙独特の『流し漉き』の技法を生むことにつながって行くのである。

流し漉き法の発明者はさだかではないが、これが行われるようになった時代は、奈良時代の末期から平安時代の初期（8C～9C）にかけての頃で貞観年間（9C後半）には一般に流行していたと見られている。このことは正倉院に収蔵の紙を年代順に調査した結果から推定されている。

2 和紙の種類と原料

『正倉院文書』のなかには、いろいろな紙の名前が見られるが、その紙名は200種以上にものぼる。寿岳文章氏の『日本の紙』によれば神亀4年（727）から宝亀11年（780）にいたる53年間に紙名は楮・斐（雁皮）・麻など紙の原料となった植物名によるもの、美作、播磨・出雲・美濃・常陸など産地名に基づくもの、あるいは黄紙・白紙・紅紙・赤紫紙といったように色相名をそのまま紙名としたもの、さらには染料名を冠したり、形状、用途、品質を示すもの、また敷金・金塵・金銀薄敷のように加工のさまをあらわしたものなど233の紙名が確認されるという。

一部に同一紙ながら二種以上の紙名を与えられる場合もあり、紙の種類そのものはそれだけの数値には至らぬかも知れぬが、一時代の紙名としては驚くべき種類があったといえよう。

原料としては先に記したものの外、梶（構）竹、榆、わら、その他さまざまなものが単独であるいは混合して用いられたが、やがて原料調達が容易で抄紙しやすく、かつ風合が優美で筆写などそれぞれの用途に適合して優れたものが残っていくことになるのである。

当初もてはやされた唐様の麻紙は、その加工

の困難さと、おそらく、それに起因する筆写の困難さ（『延喜式』には紙1枚当りの筆写文字数が定められているが麻紙は他の紙よりも少なく規定してあるのはこのためか）で、次第にすたれて行く。

和紙の代表的素材として、今日にいたるも渡かれ続けているのは、九州から東北まで広く日本の山野に自生していた楮である。楮はまた栽培も容易であったので、全国いたる所で栽培され楮原料の様々な紙が渡かれた。越前奉書に代表される奉書紙や美濃紙、漆漉しの吉野紙、世界一の薄紙である天具帖紙、あるいは実用紙の代表である泉貨紙や半紙、西の内など和紙のほとんどは楮紙といってもよいほど、多くの和紙の素材として使われている。

楮紙の特徴は、豊富な原料からくる廉価さと原料の太く長い繊維がもたらす、紙としてはたぐいまれな強度、そして男性的な風合にあるといえよう。

雁皮は雁皮紙の原料で、楮とともに和紙を代表する原料である。楮の栽培が容易なのに対し、雁皮は栽培が困難であり、野性のものを採集しなければならない。また温暖な気候を好み、自生の北限は石川県の小松市あたりである。このように供給に限界があるため、雁皮紙の生産量は楮紙にくらべはるかに少ない。ただし、雁皮の繊維は細くやわらかであるとともに紙料液の粘性を増すヘミセルロースを多く含んでいるため、抄紙しやすく『流し漉き』法発明のきっかけとなったことは既に述べた。紙の表面は平滑できめ細かく、美しい艶を持っているので、かな書用の料紙など、高級紙として高く評価されてきた。古代には斐紙と呼ばれたが平安時代の薄葉、鎌倉時代の間以合紙や鳥の子紙などが代表的な雁皮紙である。

今日和紙原料として大いに使用されているもののうち、歴史上最も遅く登場するのは三桠である。三桠は雁皮と同じジンチョウゲ科に属していて、雁皮ほどの光沢はないが、良く似た特性を持っており、優美できめの細かい紙肌を作る。文献に出てくるのは江戸時代からであるが雁皮の一種として古くから使われていた可能性

がある。本格的な使用は明治以降で、大蔵省印刷局が、三桠を使って印刷効果の良い美しい紙幣や局紙などを開発し、世界的に高い評価を受けてからである。日本の紙幣は今も三桠が主原料である。

以上のように、今日和紙の三大原料とされるのは楮、雁皮、三桠であるが、近年書道が盛んになるにつれ、竹を主原料とした画仙紙などかなり渡かれるようになってきている。

3 和紙の製造技術の特色

和紙の特色は、まずその原料が楮、三桠、雁皮などの木本靱皮繊維であるところにあるが、次いでその組織をできうる限りゆるやかに叩解して、セルロースに傷をつけないで、自然に近い状態で紙に漉き上げるところにある。

靱皮繊維というのは、植物が成長するときに、茎の表皮の下にある形成層が細胞分裂によって生じる細長い細胞であるが、楮、三桠、雁皮などにはこれが特に発達しているので紙の原料に適するのである。

これらの長い繊維を水中で、薄く、均一にからみ合わせて紙にするためには、植物性粘液（ふつうにネリという）の粘滑性を利用してよく分散させ、簀の上を流動させるが、これを『流し漉き』法と呼ぶ。前章で述べたように、この流し漉き法の完成が、和紙をして世界に比類のないものとして育てていった原動力といってよからう。ネリのおかげで紙料液はゆっくり漉されて簀の上に紙層が残るが、このことは漉槽中の紙料もまた沈澱し難いということであり、同時に繊維同志がからまって塊になるということも防いでいるのである。

簀の上の液を前後（時には左右）に揺することは繊維がその方向に美しく整然とからみ合うことであり、繊維の不規則な塊や挟雑物などは液面に浮き出るので、最後に簀の前方から余分の液とともに捨て水として除かれる。

抄造の際、最初に簀に汲み上げられる液（^{うぶみず}初水、^{かづし}数子、化粧水などと呼ばれる）は速やかにこされて粗い繊維が簀に残り、これが紙の表面となる。次の液からは、簀の目がつまるにつれて細かい繊維まで沈着する。

最後の捨て水の後、すき上げた湿紙は、溜漉きのように隔ての布をはさまずに積み上げ、水分を絞り去っても、一枚ずつはがして乾燥に移せる。それは紙の表と裏との面の組織にはっきりとした疎密の差があることと、ネリの粘性が一夜のうちにほとんどなくなるためである。これも流し漉きの合理的な利点である。

このように和紙の技術は、洋紙が主に木質繊維によるパルプを原料として機械で量産するのとは根本的に相違するが、また諸外国での手すき紙が主に麻のボロぎれやリントーなどを原料とした『溜漉き』法（ネリは用いない）によるのとも際立った差が見られるのである。

3 和紙の文化史

1 和紙のあゆみ略史

和紙に限らず、紙が最も威力を発揮し歴史上重用されたのは書写、印刷など記録のための支持体としてであった。日本への伝播もおそらくは仏教の伝来に伴う経文が最初であったろうと思われる。もち論当初は印刷術はなかったことと写経自体が信仰の現れでもあり全ては手によって書き写した。即ち写経である。ちなみに、わが国に現在する最古の写経は『諸仏要集経』（西本願寺蔵）で晋の元康6年（296）3月18日付のものである。

こうして、わが国で仏教が隆盛となるにつれ紙の需要は増し、製紙も盛んになっていった。

宝亀元年（770）には崇徳天皇の直願によって百万塔が作られ、その塔の中には百万塔陀羅尼経を一巻ずつ納めたが、この経は現在する世界最古の印刷物として知られる。（写真1）

次いで必要となるのは国家を政治的に維持するための、さまざまな記録用紙である。大宝律令の成立した大宝元年には早くも図書寮に造紙手4人を置いた記録がある。正倉院には大宝2年の美濃、筑前、豊前の戸籍が現在するが用紙はそれぞれの国で漉いたものと見られている。

さてわが国において最も和紙の用途が美術的であったのは平安時代で和歌の料紙としてであった。この時期料紙はさまざまな技巧をこらされ、飛雲、打雲（写真2）、墨流し、切り継ぎに金銀

砂子、切箔、野毛を散らし泥絵を描くなど、およそ今日考えられるあらゆる技法が行われた。第1期の和紙の黄金時代といって良からう。

鎌倉時代になると、武士も紙の消費者に加わり、木版印刷による書物が現れるが、この時代には『お伽草子』などの本が大衆に好まれ、印刷文化が登場するのである。

紙が記録用以外に住居の内装などにさかんに使われ出すのは室町時代に書院造りが流行してからであるが、ふすまや障子に広く用いられるようになる。

江戸時代にいたって、紙はついに庶民のものとなり、日常生活に不可欠のものとなった。経済的にも町人層が力をつけ、商工業は活発に動きだして、紙の需要は大幅に増大したので、各藩では大いに製紙を奨励し保護するようになった。中には藩札の品質を確保する目的や、藩財政の増収の目的で、紙を専売制とするところが出てきて、その搾取に抗して紙一揆が起った例も知られている。

文禄年間（1592）には朝鮮から新しい活字印刷の技術も導入され、『浮世草子』は大量に出版されるようになった。浮世絵師によって描かれる錦絵も大衆に愛され、多くの傑作が生れた。丈夫な和紙は商人の帳簿として大福帳となり、紙衣として衣料にも供された。江戸や大阪には紙問屋も栄えた。このように江戸時代は花咲く町人文化とともに、和紙の黄金時代であった。

明治に至って一部の藩侯専用の奉書紙などは途絶えたものの、教科書や切手、選挙の投票用紙にまで和紙の用途が広がり、需要は明治の後期まで増大の一途をたどるのである。

しかし明治維新の激変は、紙を取りまく社会にも甚大な影響を与えずにはおかなかった。

明治7年には機械による新聞用紙の製造が開始され、手漉き和紙との戦いの幕は切って落される。当初、品質において勝っていた和紙は新聞用紙など、莫大な数量を低廉な価格で生産する洋紙に次第に押されて行くのであるが、決定的なのは、明治23年（1890）に静岡県で木材パルプの製造が成功し、巨大産業が芽をふき出したことであろう。

明治36年にはついに文部省が、明治5年の学制頒布依頼固執してきた小学校用の教科書用紙を洋紙に切り換えるに至って、和紙の凋落時代がはじまったのである。

以後第2次対戦の物資不足時代などに、若干の隆盛はあったものの衰退傾向は変わらず、昭和43年には、ついに文化庁による無形文化財指定を受けるに至ったのである。明治34年の統計では、全国の手すき和紙業者は68,562戸であったが、現在は600戸を切ると見られている。

2 工芸とのつながり

主に書写・印刷の支持体でしかなかった洋紙のそれにくらべ、和紙の特色は、それ自体の工芸性もさることながら、すぐれて他の工芸とのつながりが深かった点にある。

ここで工芸とは、今日のように美術工芸のみを指すのではなく、広く生活のための道具一般をいうが（前田泰次氏によれば『工芸とは人間が生活していく際にその生活を快適にする諸々の道具器物を作ること、つまり生活用具生産の活動が工芸』である）和紙は身に着ける衣類から、建築の壁材に至るまで、実に幅広い分野に渡っている、多くの場合は工芸の素材として使用されたのであるが、清く美しいその姿から、神々に供える御幣（ミテグラ）（写真3）や仏会の時に使用される散華あるいは修業僧が潔斎の入浴の後身につける紙衣など、象徴的あるいは精神的な意味を含め和紙ならではのものも少なくない。

では以下に工芸とのつながりにおける和紙の使用例を見てみたい。

3 工芸としての和紙

和紙はそのものを優れた工芸品と見ることも出来るが、その最たるものは料紙であろう。料紙とは、広くは書き物をするための紙のことであるが、ここでは和歌を書くための用紙としてのそれを指す。特に平安時代の仮名文字の美しさはいまさらいうまでもないが、その仮名文字を書いた料紙の美しさは、その両者が相まって完成されたもので、日本の工芸史上はもち論、世界的に見ても比類のない美しさを持っているものだ。

中でも有名なものに西本願寺本三十六人集がある。これは漬染や引染で各種の色を出した染紙やまた羅文紙、飛雲紙、雲紙などや、様々の型文様を置いた唐紙に金銀泥で細密に下絵を描き、随所に継紙を使用したりする、技法的にも複雑かつ高度で豪華なものであった。（写真4）

当時舶来の唐紙も珍重されていたが、三十六人集の重ね継ぎは薄様を五枚重ねて行なったもので、紙は和製と見られている。

このように和紙の工芸的な美しさは平安時代に既に頂点に達していた。

桂離宮松琴亭の市松模様のふすまは明り障子とともに有名だが、このような日本建築の紙のドアは明り障子とともに世界に例を見ないもので、共にその紙の美しさが基本となっている。襖の場合は表面にほどこされた版画や漉込まれたパターンの面白さが決定するが、明り障子の場合は日にすかされた時の、純粋な紙そのものの美しさが問われるのである。

4 工芸素材としての和紙

（1）副資材として

和紙の長所である丈夫さ、材料の純粋さは様々の工芸制作のための副資材として使用されている。

まず、漆芸に欠かせないものとして漆濾しがある。これは漆液中のゴミなど不純物を取りのぞき肌理細かな漆を得るために必要なものである。渋を引いたものと、白紙を重ねて用いるが、特に仕上げ塗りの段階では時に渋4枚、白紙4枚の計8枚を重ねる。今日では主に経済的な理由から化学繊維製のものが多く使用されるが、上等な塗りでは今もって楮の薄紙である吉野紙が使用される。

真土（まね）型鋳物の土である真土（まね）には良質の楮紙が混入されることはあまり知られていないが、鋳金家は安価に上質の和紙原料を手に入れるため、しばしば和紙の古本を使用している。これは和紙の長い繊維が土の粘結に役立つとともに型焼成後は完全燃焼し、鋳物型として適当なポーラスな状態を作るのに役立っているものと見られている。

もっとも不思議でしかも、和紙でなくてはか

なわぬ重大な役割を果たしてきたものに箔打紙がある。金箔の厚さは0.2~0.3ミクロンと今日の科学技術から考えても常識を絶するものだが、この箔の打出しには特殊な加工を施した雁皮紙が使用されている。雁皮は繊維が細く、長く紙は特有の光沢があって『紙王』とも称せられるものであるが、これを灰汁に卵や柿渋を混ぜた特殊な液に漬けては叩くという作業をくり返して後、はじめて箔打紙となる。

箔打の初期段階では澄打ち紙^{すみうち}(¹)と称する稲のにいご(稈の穂先部)を主原料とする紙(地元では西の内紙と称しているが金沢市田の島産)も使用される。また箔打紙の上下からはさむ白蓋紙⁽²⁾は厚手の楮紙が使用されるし、仕上がった金箔を1枚ずつはさむ紙としては三桎を原料とした箔合紙がある。これは金箔を保存するのに、湿気を入れず、しかも金箔が紙に付着しにくい特色がある。((1)(2)とも今日では代用品を使用)

友禅にも型紙を使用して染める板場友禅があるが、このような型ぞめに用いる型紙もまた強靱な和紙ならではのものである。(写真5)型紙原紙の用紙は美濃紙で、美濃の製紙家が『伊勢行き』と呼んで三重県鈴鹿の型紙業界へ送っていたものである。鈴鹿は小紋、中型、友禅型などの型紙彫刻を独占的に行っている産地で、多くの彫刻師とともに型紙原紙を作る地紙屋がいる。地紙屋は和紙を伸び縮みがこないように渋紙で貼り合わせ、天日で乾燥させる。この後、本来は長期間寝かせて伸縮の狂いがこないようにするが、明治以降は木くずで10日ほど燻蒸して急速に枯らす方法を取っている。

(2) 工芸の主資材として

切絵や貼絵、和紙絵などは直接和紙を加工して作品とするものだが、立体に応用したものに紙塑人形がある。また一種の乾漆技法である一閑張りは寛永の頃(1624~44)明人飛来一閑が日本に来て始めたものといわれるが、器物の上に美濃紙を渋煎(柿渋を入れて煮た糊)で幾重にも張り固め、型からはずして漆を掛けたものである。このように紙を原料として形を作り漆などで仕上げる技法は平安時代の末ごろから様々の工芸品に使われているが、総称して紙胎と呼

ばれている。(写真6)

類以の技法で、木製や竹製の家具の表面に紙を貼りくるみ、後、漆などで仕上げる方法は、今日もなお韓国などで盛んに行なわれている。この場合完全に下地として、紙が表面の塗料の下に隠れてしまうものと、渋や植物油などをしますにとどめ、紙の味わいを残すものとある。

扇子は日本で生れたものであり、強靱な和紙ならではのものである。これには糊地の紙が使用されているが、その始まりは平安時代に遡ると見られ、もともとは屏風や襖にも使われていたと考えられる。

糊地の作り方は、雲母粉と生麩糊を足で充分に踏みしめよくまぜ、糊状になったものを生漉きの紙の両面に塗る。この結果、雲母が見え艶のある美しい表面が得られる。糊地を貼った扇は美しく、紙自体に輝きがあり、張りがある。

和紙を繊維方向に細く切って、指先でよりを加え『こより』を作って七夕飾りの短冊を笹竹に結びつけた記憶は、日本人ならば誰しも持っているようが、このこよりを応用した優れた工芸品は古くより少なからずある。

水引はこのこよりを糊で固め、金銀あるいは紅白その他の色に仕上げたものだが、結納など格式張った贈答には欠かせぬものである。金沢の津田梅氏の水引細工は、この水引の結びの技法を応用して、様々な人形などに仕上げたものである。

こよりはまた、これを長くつないでよりをかけ、つむぎ風の織物とすることが古くからおこなわれているがこれは紙布と称される。

縦、横とも紙糸のものを諸紙布、縦糸に絹、綿、麻を使ったものはそれぞれ絹紙布、綿紙布、麻紙布という。上層階級の衣料として、その独特の風合が珍重されていたが、粗成品は農夫の野良着として長く作り続けられた。一時ほとんど廃絶していたが最近各地で復興のきざしがある。(写真7)

衣料用としては外に紙衣がある。これは丈夫な楮紙をこんにゃく糊などにつけて手でもみ上げ、渋を塗るなどして仕上げたものだが、平安時代から僧の衣として使用され、戦国時代には武将達の防寒着となり、近世には貧しい人達の

日常着であった。文人達はその素朴で風雅な味わいを楽しんだが芭蕉は奥の細道への旅に『夜の防ぎ』として携行している。紙衣の産地は奥州の白石の外多くの産地があるが、それだけ需要が多かったのであろう。

最近デザイナーの三宅一生氏らがこの紙衣を使い新しいフアッションの作品を発表しているのが注目される。

こよりで作った紙紐を編み上げて、器形を作りこれに漆を塗って仕上げたものを『ながと』と呼ぶ。印籠、鷹匠笠、矢筒、火薬入れ、刻み煙草入れ、炭取り、行李、机、水筒、弁当箱、椀などが作られたが、実用品として広い用途があった。韓国にも同様なものがあり、いずれが元祖かは不明であるが、その特徴は軽さと耐久性そして独特の美しさにあった。(写真8)

竹ヒゴなどで骨組を作り和紙を張ったものは自然材の長所がいかに発揮され、美しいだけでなく実用的価値も高いものが多い。雨傘はその代表的なものであろう。傘紙は普通厚手の猪紙であるがこれに荏の油を塗って防水性を高めたものである。畳んだ時外側になる骨材部分には漆を塗ってさらに耐久性を高めている。同心円状に丸く着色されたものは、形の連想から蛇の目傘と呼ばれる。

扇子は雨傘と異なり横方向にずらして開閉する機構を持っているが、独特の日本的造型は舞踊など、他の伝統芸能にも欠かせぬものとなっている。

雨に対するものとして、傘の外に雨合羽がある。こちらは桐油を塗るが、その軽さを生かして懐中合羽なども作られ旅の必需品であった。江戸には合羽屋という専門業者もあった。

光の透過性を利用したものとして、行燈、提燈、灯籠がある。行燈は多くは木のフレームに和紙を張ったものだが、内部で、油を灯芯で燃やし間接的に照明するもので、特に江戸期に盛んになった。(写真9)壁かけ型や吊すタイプのものなど様々なデザインがある。灯籠は屋外用であり、提燈は携帯用として折畳みのできる優れたものだが、さらに柿渋、漆などで加工し、耐久性も考慮されていた。

おわりに

工芸史の見地から和紙の由来とその変遷を見てきた。冒頭で述べたように今日では合成紙を始め、ポリスチレンペーパーや、さらには不織布まで広義の紙に類するものは極めて多く、我々が日常目にする紙もほとんどが、これらを含む洋紙となっている。したがって、いきおい産業としての和紙は見るかげもなく衰退しきっている訳であるが、一方で和紙はこれら洋紙群とは全く違った面で優れた特性を持っていることもまたあきらかである。何よりもそこには千数百年にわたって日本の文化を支えてきた伝統があり、捨て去ることのできない日本美のエキスがある。完成されたその技術はなお多くの展開の可能性を秘めている。従って無形文化財として保護して行くことは必要ではあるが、金箔打ち紙や上等の漆漉しのように、まだまだ和紙でなければ果せぬ用途も多いし、紙幣のように伝統的な和紙の技法が、工程のどこかで生かされているために、丈夫で美しく他国の追随を許さないものもある。和紙の使命は終ってはいないのである。日本の文化史、技術史を通して流れる、いわばバックボーンと見なされる和紙の技法は今後も守られねばならないし、それだけの価値を内包している。

最近、和紙のすばらしさを知った一部のデザイナー達が、照明器具や間仕切りスクリーンや各種ステーションナリーや、その他の生活用具を和紙を使って開発し、一部は成功を納めているようであるが、和紙の工芸素材としての価値が今日なお高いことを証しているといえよう。(写真10)

参考文献

1. 日本の紙 寿岳文章 吉川弘文館(昭和53年)
2. 紙の科学 町田誠之 講談社(昭和56年)
3. シリーズ〔紙の文化〕1 和紙事典 朝日新聞社(昭和61年)
4. 毎日新聞社版 手漉和紙 毎日新聞社(昭和50年)
5. 日本の工芸4 紙 田中親美他 淡交社(昭和41年)
6. HANDMADE PAPER TODAY Turner & Skiöld Lund Humphries Publishers Ltd. (1983年)
7. 工芸とデザイン 前田泰次 芸艸堂(昭和53年)



写真1 百万塔陀羅尼經

——奈良法隆寺伝来（重文）

麻紙に「根本」「相輪」「自心」「六度」の四種の陀羅尼經が印刷され、それぞれが木造三重の小塔へ納められている。

宝亀元（770）年に開版されたもので年記のある印刷物としては世界最古。

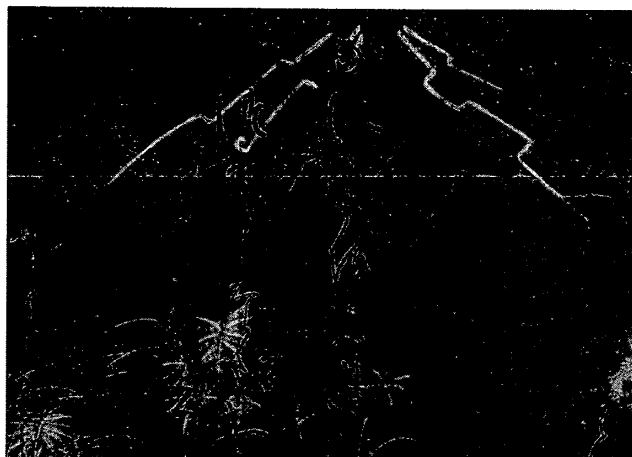


写真2 打雲（うちぐもり又はうちくも）

——伏見天皇宸翰源氏物語拔書 文化庁蔵

あらかじめ紺色、紅色に染めた雁皮繊維を台紙の上に漉きかけたもの。（参考文献3より）

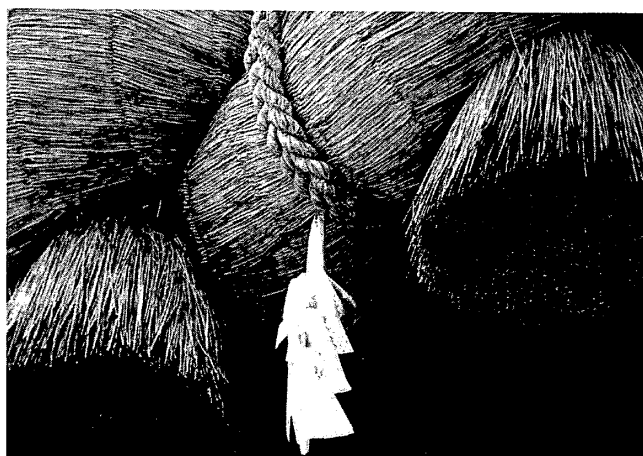


写真3 出雲大社の御幣（みてぐら）

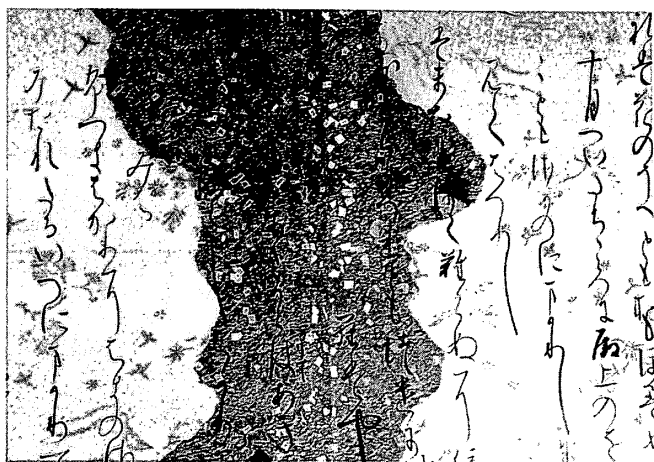


写真4 西本願寺三十六人家集（国宝）

唐紙と羅文紙の切り継ぎ。金銀箔、砂子さらに雲母刷、描絵など可能な限りの装飾の枠を集めた料紙に、当代の能書家により三十六家仙の歌が書写されている。

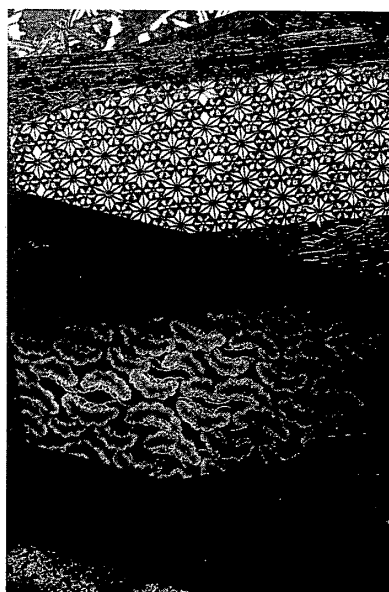


写真5 染の型紙 小紋のいろいろ

（写真1、4、5、は別冊大陽、和紙1982より）



写真6 紙塑人形
「大森みやげ」
鹿児島寿蔵
東京都国立近代美術
館蔵
(参考文献3より)

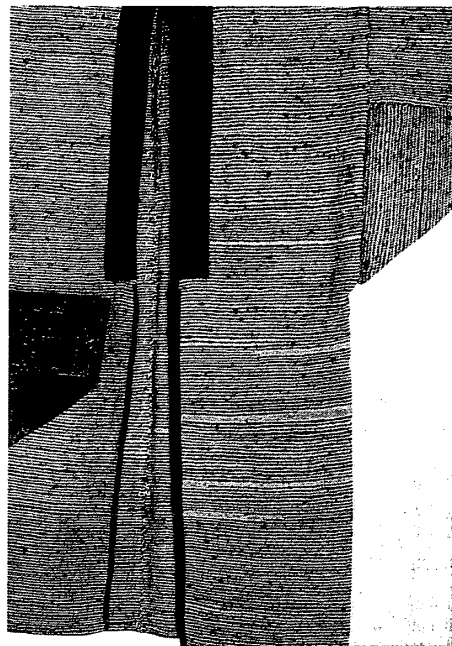


写真7 紙布 野良着(部分)
楮紙を細く切り裂き、こよりにして
繫いで糸にしたものを織ったもの。

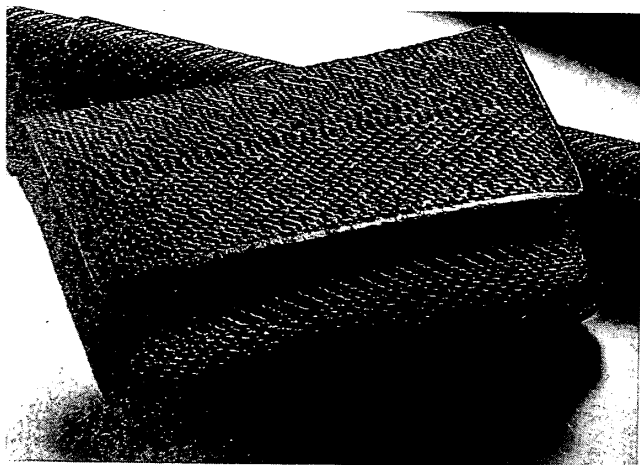


写真8 長門(ながと)煙草入れ
こよりを編んで漆をかけたもの。

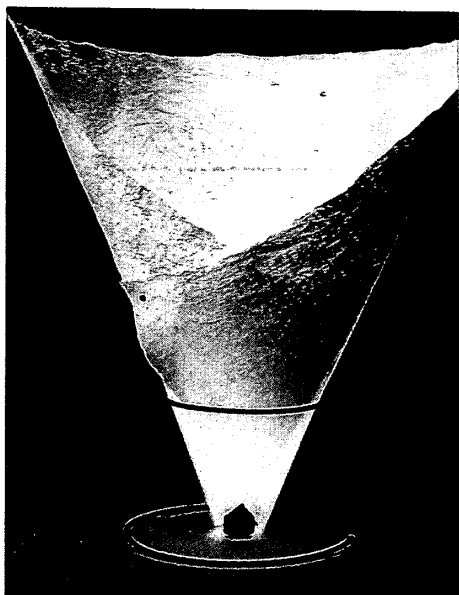


写真10
フロアランプ
「アンドン」
森島 紘
こんにゃく糊で加工
した『もみ紙』使用。

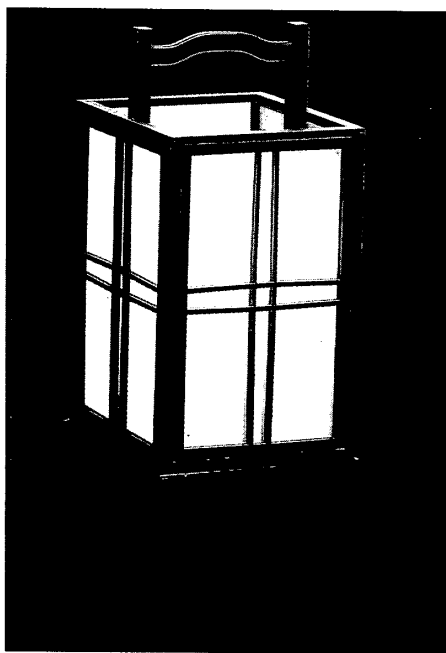


写真9 行燈(あんどん)
江戸の燈火器の主役であった行燈の一
タイプ。
本体は朱、格子は黒に塗り分けてある。
日本民芸館蔵
(写真8, 9は図録, 江戸の民芸より)